様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　１日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19530824
研究課題名（和文）　感性の涵養とコミュニケーション能力育成のための実証的・国際的俳句指導の研究
研究課題名（英文）　A study on instruction haiku to nurture sensitivity and communication competence

研究代表者
中西　淳　（NAKANISHI MAKOTO）
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：10263881

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、北米における効果的な俳句指導のあり方を探るところにある。筆者は 2005 年に、取り合わせの技法と「句会」を取り入れた授業を我が国の小学生に対して行い､俳句の面白さを味わわせるための教授法としてそれが有効であることを示した。そこで、その教授法は北米でも通用するのではないかと考え、2008 年に同様の方法でカナダのトロントの小学生を対象に俳句の授業を行った。その結果、取り合わせの技法と「句会」を取り入れた授業は、北米においても有効であるという結論が導かれた。

研究成果の概要（英文）：This purpose of this paper is to investigate an effective method of teaching haiku to elementary school children in North America. In 2005, we pointed out that the method of teaching haiku by introducing the technique of juxtaposition and the use of *kukai*（traditional haiku sharing circle）was effective for Japanese elementary school children. In 2008, we tried this haiku teaching method with Canadian elementary school children in Toronto. In this exercise, students wrote good haiku and showed an excellent appreciation of other students' haiku. Further, the data from the class participants showed that they saw it as easy and fun to make haiku and share them with their classmates. This experimental practice shows that the teaching method of juxtaposition and *kukai* is effective in haiku lessons in North America.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：俳句、haiku、コミュニケーション、取り合わせ、句会

１．研究開始当初の背景

俳句は、現在、世界五十か国以上で、三十ちかくの言語を用いて作られている 。特に、英語圏においてその広がりは顕著であり、アメリカ・イギリス・カナダには俳句の諸団体がいくつか存在し、それは多くの人に親しまれている。また、アメリカの小学校教育においては、すでに 1960 年代初めの頃から情操教育として国語の授業で取り扱われていることが指摘されており、現在においては、詩教育の一環としてそれに関する教師用指導書や児童書が出版されている。さらに、カナダのオンタリオ州においては、教育省が発行した『オンタリオ州カリキュラム第１学年～第８学年言語（改訂版)』(2006）の第６学年「書くこと」の項に「haiku」という用語を認めることができる。このように俳句は、学校教育においては感性を涵養する詩教育の一環として取り扱われている。

そのような状況下で、我が国では平成 23 年度から実施される小学校学習指導要領において、5・6 年生の「書くこと」の言語活動例の中に俳句の創作が明記された。今後、我が国においても、創作を軸として展開される授業が増えてくるものと予想される。

以上のような海外と我が国の学習者を取り巻く状況を踏まえると、俳句は、我が国と海外の学習者を繋ぐ表現媒体（コミュニケーション媒体）として魅力的なものになると考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、俳句による国際交流を視野に入れた、効果的な俳句指導のあり方を、実際に北米で授業を行うことにより探求するところにある。

３．研究の方法

（１）北米における俳句界の状況を捉える。

（２）学校教育で俳句がどのように取り扱われているのかを捉える。

（３）北米の俳句及び俳句指導の状況を踏まえながら、俳句を楽しむことのできる授業プランを作成する。

（４）授業を実践する。

（５）授業の考察・検討を行う。

４．研究成果

（１）北米における俳句の取り扱い及び俳句界の現状について

北米における俳句の取り扱い及び俳句界について以下の状況にあることが明らかになった。

① 俳句の本質や形式（定型と季語）についての議論が長い間重ねられていること、それが今も続いていること。

② 北米の俳句界は、五七五（シラブル）の定型と季語を持たなければならないとする保守派、それらにそれほどこだわらない中間派、さらにそれらを否定し自由律俳句を主張する急進派の大きく三つに分けることができるという指摘があること。

③ 北米の俳句の歴史は俳句の客観性・主観性・写実性などの点から、四つの大きな世代に分けられること。（Bruce Ross(1993)Haiku moment ： *an anthology of contemporary North American haiku* による）

④ 俳句歳時記の作成が試みられていること。たとえばWilliam J. Higginson (1996) *Haiku World: An International Poetry Almanac,* Kodansha International.

⑤ 二物衝撃ともいわれる「取り合わせ」の手法はジャクスタポジション(juxtaposition)、もしくはモンタージュ(montage)と訳されていること、また、多くの俳人がその手法を用いていること。

⑥ 学校教育において俳句は詩教育の一環と

して取り扱われ、その紹介は「十七シラブル（五七五）の三行で書かれ、しばしば自然を題材としているとても短い日本詩のスタイル」というものが一般的であること、授業の展開は、鑑賞を軸としたものが多い我が国とは異なり、創作を軸としたものが多いこと。

（２） 北米における俳句指導の実験授業について

以上のことを踏まえながら、俳句を楽しむという目標のもと実験授業を構想し、それを実施した。

学習者の俳句作品と、鑑賞時における学習者の発言、そして、授業後の学習者と担任教員の感想を分析した結果、実験授業における次のような指導法は、北米における俳句指導のひとつとして有効であることが示された。

① 俳句の定義

俳句を「季語を含む三行の短詩」と定義し、そのシラブル数は十七以内を目安として取り扱う。

② 授業の展開

俳句の楽しさを味わわせるために、創作支援として「取り合わせ」を、鑑賞支援として「句会」を取り入れる。

授業展開は以下の通りである。

〇事前準備　ミニ歳時記の作成

授業を行ったカナダのトロントには我が国のような歳時記はない。ゆえに、俳句の創作に入る前に、学習者に春の季語を収集してもらう。

〇第一時　俳句素材の収集

俳句創作を、取り合わせの技法に即して、俳句の素材を収集する段階と、それに季語を取り合わせて俳句を完成させていく段階の二つに分ける。さらに、その活動を具体的に支援するための創作プリントを作成する。

俳句素材の収集の授業では、創作プリントを用いながら次の二点を強調し、収集の要領を理解させる。日常において心に留まったことを写真のスナップショットを撮るような感じで書き留めること、五感を働かせること。

〇第二時　俳句の完成

創作プリントにある筆者の俳句素材を取り上げ、取り合わせによる創作の要領を、加える季語や位置を変えながら、次の手順で把握させる。

・プリントにある「Ｉ found　grandpa waves his hand at the station」を黒板に示す。
・「I found」を消し、その代わりに季語「spring rain」を入れ俳句を完成させる。そして、どんな情景が浮かぶか考えてもらう。
・「spring rain」を「tulips swaying」に入れ替え、その前の情景とその後の情景とがどのように異なるのか違いを考えさせる。
・「tulips swaying」の位置を、俳句素材の二行の前からその後に移す。そして、立ち上がる情景が、俳句素材の前と後ではどのように異なるのかその違いを考えさせる。
・俳句素材を「Ｉ found　a hard-boiled egg rolling down 」に入れ替え、どのような季語（を含んだフレーズ）を用いるとよいか、また、どの位置に置くとよいのか、壁に貼ってあるミニ歳時記を見ながら考えさせる。

最後に、自分が収集した俳句素材に見合った季語（の入ったフレーズ）を考えながら、俳句を完成させていくよう指示を出す。俳句完成の後、創作プリントを提出させる。

〇第三時　句会形式による俳句鑑賞

提出してもらった創作プリントの中から最もよいと思われる俳句をひとつ選び、それを事前に模造紙に転記しておく。それを黒板に貼り、次の手順で作品をひとつずつ鑑賞し

ていく。

・俳句を読み上げる（披講）。

・読み上げた俳句がよいと思った者は挙手し、そこから立ち上がる情景や感情など、よいと思った理由を述べる（選句・合評）。

・授業者がコメントを述べる（合評）。

・作者を予想する。

・作者を明らかにする（名のり）。

鑑賞のポイントとして、「俳句は作者の思いが言葉に凝縮されているので、読者がイメージを広げながら読んでいく必要がある」ということを伝える。また、イメージ形成を促すため、コメントにおいては、季語や五感に着目した筆者の読みを示したり、学習者の発言をもとにその鑑賞のあり様を明確化したりする。

③　実験授業のまとめと今後の課題

ここでの試みは、筆者が我が国で行ったそれとほぼ同様である。また得られた成果もそれとほぼ同様である。このことは、短詩に対する学習者の感性には言語や文化を超えて共通するものがありそれは国を超えて共有することが可能であること、すなわち、俳句の文芸性に依拠した国際交流の可能性を示唆している。また、本授業では担任教員が学習者と同じ活動に参加し、俳句の教材価値を実感してくださった。俳句による交流を実りあるものにしていくためには、この点を大切にしていかなければならないと考える。

俳句による国際交流を実現するにあたっては、翻訳と季語に関する問題を避けることはできない。今後は、それらの点について検討を加えながら、その交流を実現するための具体的な方策を探っていく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）

① 中西淳、「北米におけるハイク指導の実践的研究」、国大学国語教育学会編『国語科教育』66 集、査読有、2009、pp.59-66

〔学会発表〕（計３件）

① 中西淳、「Teaching Haiku in Japanese Elementary School」2008 Haiku Canada conference2008 年５月オタワ

② 中西淳、「北米におけるハイク指導の試み」第 115 回全国大学国語教育学会（福岡大会）2008 年 11 月北九州国際会議場

③ 中西淳、「カナダの小学校における俳句指導実践」第１回日本俳句教育研究大会 2009 年１月子規記念博物館

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者

中西　淳（NAKANISHI　MAKOTO）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：10263881

(2)研究分担者

なし